
B・B・B――ベース・ボール・ブレイブス――第一部・熱き夏のブレイブス

あし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B・B・B——ベース・ボール・ブレイブス——第一部・熱き夏のブレイブス

【Nコード】

N3942E

【作者名】

あし

【あらすじ】

また今年も闘いが始まる。かつての伝説へ、そして、誰もが望む頂点へ。球児達の闘いを描く青春系高校野球群像小説。

第一章 開戦編その1 夏、来る——蘇る戦いの鼓動——（前書き）

＊注意！

この作品は現実をモデルにしたフィクションです。実在の人物・団体・事件とは、一切関係ありません。また、実在する団体を誹謗中傷するものではありません。

第一章 開戦編その1 夏、来る——蘇る戦いの鼓動——

また今年も、夏が来た。梅雨が明ける頃始まりを告げる各地の予選は夏の深まりと共に熱を帯びていく。

そして、全国制覇を目指す戦士達が徐々に顔を揃えて行く。

「琉球水産ついに復活！ 8年ぶりの出場を決めました！」

復活を果たしたく南の名門＞琉球水産（沖縄）。

「押本、貫禄の15奪三振で南北海道3連覇！ 今年こそ大旗を北海道に持って来るのか！？」

超高校級エースを擁する北の強豪北龍（南北海道）。

「サヨナラ、サヨナラです！ 佐渡島、ついに初出場を決めました！」

変化球エースが大黒柱を担い、初出場を果たした佐渡島（新潟）。

「最後の1球もとうとうかすらず、宮沢、なんと18奪三振！ 天理天道、＜西の奪三振王＞宮沢を旗頭に全国の強豪に挑みます」

＜西の奪三振王＞がエースを務める強豪、天理天道学社（奈良）。
「行ったあー！ 鈴木、大会4本目は甲子園行きを決めるサヨナラホームランです！」

今夏最注目目の4番打者が率いる攻撃型チーム、昇竜国際（東京都）。

「菊川昭栄、7回8回の連打で見事に逆転！ 春夏連覇へ、チームは確実に強くなっています！」

春を制し、勢いに乗って連覇を目指す野球の常識を覆すチーム、菊川昭栄（静岡）。

「前田がまた打った！ なんとこれで打率6割に到達！ 1年生とはとても思えません！」

1年にして＜天才＞の名を欲しいままにする男、前田智を得た強豪、中京崇城（愛知）。

地元で本命視されていたこれらの学校は皆、順当に甲子園出場を決めた。

その一方で、＜近江の闘将＞かだしげる加田茂（3年）の率いる安土城学園（滋賀）がついに初出場を決めて涙を流し、茨城では、総城学園の2年生、佐藤満さとうみつるが県大会打率8割を達成して全国の話題をさらい、大阪では、3人もの1年生を起用した春堂高が名門GL学院を倒し、前評判を覆した。

忙しさを増していくオフィスの中、男の声がこだまする。

「そろったか」

月刊ハイスクール・ボラーズ（通称月刊HB）の編集室で髪に白いものが増えつつあるベテラン記者、古川巧ふるかわたくみは呟いた。今年の球児達は、昨年甲子園を席卷した＜爆砲世代＞には及ばぬものの、例年よりは豊作だと言う。

中でも、押本、宮沢、鈴木の3人はプロのスカウトも注目する逸材である。また、2年生以下にも＜天才＞前田を中心に気になる選手が何人もいる。

そして組み合わせの方も彼らが上手く散らばり、見所が豊富にありそうだ。

「今年も面白くなりそうだな」

古川が席を立つ。その視線はまだ見ぬ今年の甲子園を夢見ていた。

やがて時は過ぎ、本格的に夏の季節を迎え、甲子園に球児達の戦いの声が蘇る。そして、大会2日目。早くも甲子園を震わせる強者が現れる。その日は、第3試合も終わり、夕闇が迫っているにもかかわらず、球場は熱を帯びていた。それは、この後現れる人物に対する期待の高さを表していた。

奈良の名門、天理天道学社の誇る〈西の奪三振王〉みやざわせいや宮沢誠也。彼が現れる以上、1日目の琉球水産や本日試合のあった安土城学園が順当に勝ち、その力をどんなに見せつけても、彼の前には前座にし

かならない。そして、彼は自身の持つ力をはっきりと表現し、期待に応えた。

「三振、三振！ 宮沢、早くも今日10個目の三振だあ！」

5回表、宮沢は三者連続三振で2桁奪三振に到達する。そしてその裏、天理天道は3点を追加して8―0にリードを広げた。

「宮沢。悪いが、次の回を終えたらマウンドを降りてもらうぞ」

6回表終了直後、奪三振を11に伸ばした宮沢をベンチ内で監督が呼ぶ。宮沢は最初は耳を疑ったが、やがて納得したのか、ベンチに座り込んだ。

そして7回表、宮沢がマウンドに立つ。その表情に迷いはない。

（チーム事情とはいえ、ここで降りるなんてな……。だがなあ……）
豪快なワインドアップ。

（全力は出し切ってやる！ 悪いがお前達には負けてもらうぜ！）

上背のある肉体を、目一杯使った大きなフォームから放たれた直球は、9球ともマウンドからミットまで駆け抜けた。三者連続三球三振に仕留めたのである。

「恐ろしい男だ」

記者席で古川が漏らす。相手校ベンチも同様であった。宮沢はわずか9球で敵の闘志を奪い去り、古川には三振の生み出す力を十分に見せ付けたのだった。

相手校の決死の歓声も空しく、9回表最後の打者もアウトに終わり、審判の声が球場に響く。

「ゲームセット！」

その後の敵の反撃はわずかに2点。宮沢も結果に満足したのか、微笑を浮かべていた。そして……

「あのストレートは一筋縄では打てそうにも無い。そして、変化球も良い。やはり、今年の投手の双璧は宮沢と押本だな。いや、もしくは押本以上か……」

古川は、その戦慄をしばらく止めておかざるを得なかった。観客が満足そうに帰途につく中、古川は一人、今後の戦いに思いをはせていた。

その2 伏兵の力、彼らの真実

宮沢の衝撃。それは確かに甲子園を震撼させた。しかし、時は移ろい、過ぎていく。そして古川もまた、他へ目を向けて行く。

「あの大阪を制した伏兵、春堂高。それに一役買ったという1年生3人。果たしてどれだけの力を持っているのか……」

大会3日目第3試合

春堂（大阪）―知覧誠兵舎（鹿児島）

地元代表の登場とあって、甲子園は当たり前のように満員となっていた。当然古川も記者席にいた。

「やはり、まだまだだったか」

試合開始直前、スタメンオーダーを見て古川はうなずいた。春堂の1年生3人の内、先発はセカンドの勝田のみだった。

この勝田という男、府大会でも早くからスタメンに入り、決勝のGL学院戦ではだめ押しのタイムリーを放っている。こうして見た限りでは、守備も良いようだ。それと比べると、他の2人はもうひとつだと彼は思っていた。

4回表、いまだ両チーム共に無得点。1死2塁の状況で6番の勝田に打順が回る。彼の鋭い目は、相手守備陣をまっすぐ見詰めていた。

「あそこだな。さて、『仕事』の時間だ」

彼はあるポイントを見、決断した。後は打つだけである。そして……、

「勝田打った！ 三遊間を抜ける！ ランナー帰ってホームイン。

春堂高先制！」

彼にはそれを遂行するだけの力がある。

「あれは、狙ったようだな」

鮮やかな手並みの巧打に古川も驚きを隠せない。しかし、当の本

人はセカンドベースで表情も変えずにたたずんでいた。

結局この回、春堂はさらに1点を追加した。彼らは確実に伏兵の力を見せつけていた。だが……、

「何故だ？ 俺の勘がこのままでは終わらないと言っている」

古川に悪い予感がよぎり、彼は顔をしかめた。

「そろそろかな」

「はい」

ベンチで交わされる意味深長なさやき。謎に包まれた知覧の作戦が、この試合に混迷をもたらそうとしていた。

そして、そのまま迎えた6回裏、知覧の作戦がついにその威力を発揮する。

「ヒット、ヒットです。知覧誠兵舎、同点に追いつき、なおもワンアウトランナー2、3塁。連打が止まりません」

3塁側アルプスが盛り上がり、球場の空気がにわかに変わる。

「監督、これは一体？」

キャプテンの吉永が問う。春堂ベンチもさすがに動揺は隠せない。控え選手達も立ち上がり、心配そうにグラウンドを見つめている。

「やられましたね……。私のミスです」

監督が呟く。彼は気づいていた。マウンドに立つ3年生エース、香川の投球数が、無失点にしては異様に多いことに。しかし今は、采配のミスをどうこう言っている場合ではない。事態を止める最良の決断が必要なのだ。

「仕方ありません。神楽君、行ってください」

彼は決断し、ベンチの奥に声をかけた。

「ピッチャーの交代をお知らせします……」

アナウンスと共にマウンドに降り立つは背番号10。

「ついに出てきたか。1年生2人目、かぐらやすはる神楽泰治」

記者席から古川も身を乗り出す。府大会でも神楽の登板はあまりなく、データが少ない。そしてその体は普通の高校生よりも小さい。果たして彼にこの場面をしのげるだけの力があるのか。古川はそれ

が知りたかった。

「行こう。まずはこれだ」

捕手のサインに答えての神楽の1球目はカーブ。それは外角低めギリギリに見事に決まった。しかもミットを動かすことなく。

「これは……、このコントロールは予想外だ」

古川、そして知覧の監督が認識を改める。

（今の内に揺らす。これで行け）

知覧ベンチから、サインが飛ぶ。そして、それは見事に遂行された。

「しまった！」

神楽が焦る。放たれたのは絶妙な位置へのセーフティースクイズ。彼も、そして、球場の誰もが予期していなかった。しかし、反応した者は、いた。

「任せろ」

影が走り、球を捕る。そして影は冷静に球を投げ、1塁を仕留める。自身の守備位置、セカンドから突っ込んだ勝田だった。

「すまん……」

「この状況ならアウトが先だ。逆転は仕方ない。だが、後は抑えろ」
きっぱりとした言葉が、神楽を引き締めた。

白球が1塁線を駆け抜け、ランナーが両手を上げてホームを踏む。

「これで同点だな」

後続を神楽が仕留めて迎えた7回、再び勝田はその力を発揮し、同点タイムリーを放つ。

「これで2打点。さっきの守備といい、彼の力は本物だな」

古川も彼を認める。そして……

1 2 3 4 5 6 7 8 T

春 0 0 0 2 0 0 1 3 6

知 0 0 0 0 0 3 0 3

「これで終わりだ！」

8回表、言葉と共に抜群の手応えで捕らえられた打球は高々と上がり、ライトスタンドへ消えていく。相手投手はガックリと肩を落とす。観客もその放物線に息を呑む。

「これは驚きました！ 代打の1年生久坂、特大のスリーランで一気に試合をひっくり返してしまいました！」

止まることのない大歓声の中、その立役者は自信満々にベースを回り終えると、ベンチ前でヘルメットを外し、言い放つ。

「神楽、後はてめえの仕事だ」

「そうだな」

神楽の表情はどこと無く満足げだった。

「ゲームセット！」

9回裏を神楽がきっちり3人で終えた直後、古川は記者席で一心不乱に記事を書いていた。

「勝田も、神楽も、そして久坂も、間違いなく本物。今伝えなければ……」

彼は焦っていた。春堂の次の相手は「あの」昇竜国際。正直な話、次も勝てると断言はできない。だからこそ、今、書くのだ。

「春堂か。面白い相手になりそうだ」

その昇竜国際の誇るスラッガー、鈴木友雅が、スタンドでほくそ笑んでいたことなど、彼には知る由も無かった。

その3

激闘、死闘、全てを飲み込み、甲子園はその激しさを増していく。そんな中、古川の注目する男達は、その実力を確実に見せていく。

「三しーん！」

興奮した実況の声と共に観客が熱狂する。その男の投球はまさに芸術。

「な、何故だ」

相手は戦慄し、戸惑い、動揺するのみ。

佐渡島高校、宮本俊（3年）。見た目華奢な肉体から放たれる、120キロ台の直球をキレのある多彩な変化球で引き立てるピッチングは打者の目を狂わせ、自信を奪う。焦れば焦るほど、彼の思いのままにされていく。

「ふう」

9回を12奪三振で完封し、マウンドを降りていく宮本。しかし、スコアはいまだ0―0。元々攻撃力を欠く佐渡島もまた、敵を攻めあぐねていたのだ。だが、彼の瞳には希望が満ちていた。

スタンドに歓声がこだまする。相手校はその衝撃に膝を付き、悔しさに肩を震わせる。

「見事だ……」

古川が呟く。9回裏、佐渡島は粘りに粘ったの四球から、盗塁、送りバントを経て最後は警戒をすり抜けてのスクイズ。なんとノーヒットで1点を奪ったのだ。

「確かに情報通り。しかし、噂の『新球』はどうやら見れなかったようだな」

そして、＜天才＞前田を擁する中京崇城も、あっさりと勝ち上がる。

しかし……、

「北龍、2回を終わって1点のビハインド。押本、一体どうしてしまったのでしょうか」

意外な苦戦を強いられるチームが、そこにいた。

「くう……」

大柄な体をねじ込むようにベンチに座る北龍のエース押本神威（おしもとかむい）（3年）。誰が見てもイラっているのは明らかだ。

「落ち着け」

隣の男がたしなめる。眼鏡をかけているが、まだ若い。北龍高校監督、武蔵一。かつて＜三島世代＞の一人として、1994年夏の決勝に進出、＜史上最大の三振ショーバトル＞を繰り広げた男である。

「お前は栄冠を勝ち取れるピッチャーだ。去年より上に行きたいのなら、この程度の状況で動揺するな」

言い返せない押本。脳裏に去年の記憶がよみがえる。決勝まで勝ち進みながら、＜爆砲世代＞の筆頭、浮島智也（うきしまともや）の一撃に沈められたあの日、彼は強くなることを誓ったのだ。

「そうでしたね」

押本が立ち上がる。その眼前では味方が必死の攻撃でチャンスを作っている。

「行ってきます」

決意を込めて、彼は、行く。あの日の屈辱を晴らし、頂点に立つために。そしてその思いは得点となって結実した。

その数時間後。甲子園は既に闇に包まれようとしていた。観客も去って行き、まばらになったスタンドに古川はいた。

「凄まじい試合だった」

古川の目の先には、消え行く電光掲示板。その延長16回表の所には、

「1」の灯が点いていた。

北龍の相手、広島代表厳島高校。高校野球ファンの間では有名な学校のひとつであり、飛びぬけた選手はいなくとも、戦略と総合力で有力校から勝ち星を拾うしたたかさを持つ。そして、この試合でもその力は発揮された。

「くそ。また交代かよ」

状況に合わせてめまぐるしく変えていく4人のピッチャー。

「おおおお！」

圧倒的な押本の力にも屈せず、食らい付いていく選手達。彼らは全ての力を駆使して北龍に立ち向かった。

そんな中、押本は少しずつ進化していく。

「な……」

15回裏、2死ランナー3塁の状況で投げ込まれた球のスピードは今大会最速の154キロ。もはや、彼らの勢いが届くものではなかった。そして、その直後に北龍の4番佐倉がホームランを放ち、全ては砕かれた。

試合が終わり、両者がしっかりと握手を交わす。

「優勝しろよ。健闘、祈ってるぜ」

「ああ。見てくれ」

その中で交わされた和やかな挨拶が、死力を尽くした戦いだったことを証明していた。

北龍ベンチ裏。2人の男が言葉を交わす。

「肩が重いな。佐倉」

「なあに。俺達が付いてやるよ。その代わり、きっちり抑えろよ」
「そうだな。頼んだぜ。飛び切りの一発をよ」

投手が野手を、野手が投手を信頼する。彼らは確実に頂点へのステップを踏んでいた。

その4

その対戦が決まった時、抽選会場はざわめきに包まれた。

——有力2年生対決——

ある新聞の記事によってこう名付けられたその対決は、またも甲子園に大量の観客を引き寄せた。

総城学園（茨城）—二条学園（京都）

茨城から彗星の如く現れた安打製造機、佐藤満とまだ2年生でありながら、既に今大会ナンバーワン左腕との呼び声も高い岡忠弘わかただひろの対決である。

「県大会打率8割?! 関係ねえな。『井の中の蛙』という言葉を教えてやるよ」

試合前、岡はチームメイトを前に高らかに言い放つ。それは、彼のプライドであり、また、この日の為に練習をつんできた証でもあった。

一方総城ベンチ。既に試合目前だというのに、なぜか静まりかえっている。しかし、その中に確かに声は存在した。

「佐藤は今日は……だ。この試合は君達にかかっている。いいな」

「はい」

重要なキーワードこそ歓声の中に消えたものの、彼らは今日の勝利へのプランをしっかりと理解していた。

あらゆる思惑を秘めて始まった有力2年生対決。その1回表、県大会と同じく2番に座る佐藤と、マウンドの岡が始めて顔を合わせる。

（意外と小柄なやつだな。しかし、真剣にやらせてもらうぜ）

140キロ台前半のストレートを、ストライクへ2つ続けて投げ込んだ次の3球目、右打席に立つ佐藤の内角へ食い込む大きなカーブ。岡が最も自信を持つ球。

「これでどうだ!」

三振を確信する岡。しかし佐藤は、冷静だった。

(来た！ 監督の言っていた例の球！)

カーブ打ちを鍛えていた体は自然に反応し、その球を綺麗に打ち返す。その結果、涼やかな音を残して、白球は1塁線を抜けた。

気温の上昇の中、観客のボルテージは落ちることは無い。しかし、彼らの温度は冷え切っていた。

「く……なんなんだ一体」

屈辱に打ちひしがれる二条ベンチ。誰もが電光掲示板のその光景を疑っていた。

1 2 3 4 5 6 7 T
総 0 0 1 0 1 2 0 4
二 0 0 2 0 1 0 0 3

「……」

試合前、あれだけの自信を持っていた岡も、言葉を失っている。まさに何が起こったのか分からないと言った風であった。

しかし、記者席の男の双眸はこの試合の真実を既に見抜いていた。

「これは、『マジシャン』春田氏の仕業だな」

『マジシャン』――。

長年に渡って総城の監督を務め、春夏合わせて甲子園出場は11回。その内、春2回の優勝経験を持つ春田^{はるたな}長俊氏を、その変幻自在な采配から人はこう呼ぶ。

「佐藤に岡の決め球、内角へのカーブを狙い打ちさせ、佐藤への意識をさらに集中させることで他の打者を楽にする。こんな戦略、彼にしか徹底できないだろうな」

古川は改めて彼の采配に舌を巻いた。

8回表、ノーアウトランナー2塁。この状況で佐藤は4度目の打席を迎える。

「佐藤、もう四はい。決めて来い」

「はい」

監督の許可を得、彼はこの試合おそらく最後となる打席に立つ。

「ち……。しかしまだ1点差だ。ここさえ抑えりや何とかなる」

逆転へのかすかな希望と、自身のわずかなプライドを胸に、岡は自らの意識をさらに集中させて、ここまで1安打に抑えてきた佐藤と相対する。だが……。

「悪いけど僕は……。上へ行くんだ」

決意をこめた打球が、左中間へのびて行く。

「『井の中の蛙』は、俺の方だったか……」

その打球が岡に敗北を受け入れさせた。

総城5―3二条

9回表、最後の打者がアウトに終わった瞬間、『マジシャン』はサングラスの向こうに素顔を隠し、密かに微笑んでいた。

その5

最初は、誰もがフロックだと思っていた。しかし、彼らは本物だった。

2007年選抜大会覇者、菊川昭栄高校（静岡）。あらゆる手段で野球の常識を覆し、春を制した彼らは、さらに強くなってこの場所に戻ってきた。

「あーっと！ スクイズ成功、1点追加。あつ、2塁ランナーも突っ込んでくる！ ファーストの返球は間に合わない。5回表、菊川、さらに2点を追加して7-0に点差を広げます！」

「強くなったな。彼らは……」

古川はため息を吐く。春を制した時はいわゆる『旋風』のひとつとしか思ってたが、今やどうだろう。すっかり王者の風格を漂わせているではないか。

「全くですな」

古川の背後から突如、声がかかる。振り向けばそこには、第1試合で完勝をおさめた『マジシャン』の姿があった。

「春田さん！」

古川は思わず立ち上がるが、春田はそれを止める。

「このままで結構。ところで、あなたは？」

「あ、申し訳ない。私は『月刊HB』の……」

古川は名刺を手渡す。

「なるほど。道理で私のことを……。しかし、高校野球とは面白いものですなあ。長く見ているとああして、常識の通じないチームが出てきたり、並みの高校生じゃ太刀打ちできないような選手が出てきたり。これだから監督業をやめられないんですよ」

「ええ」

古川の見た彼の顔は、どこか寂しさを滲ませつつも、まるで子供のように微笑んでいた。しかし、その顔が突然、真剣なものに変わ

り、口調にも熱がこもる。

「ですがね。私がやっているのもまた、高校野球なんです。決して彼らは無敵ではないんです」

「と、言いますと？」

古川はここで答えを引き出さんと一気に詰め寄る。だが、

「おっと。口が過ぎましたな。まあ、ひとつだけ言える事は、我々は『高校野球』をするということですね。いずれ御覧に入れますよ」
春田の口調が元に戻り、古川は軽くなされてしまった。春田が去っていく傍らで、菊川は点差を9に広げていた。

最終回の決死の反撃も1点に終わり、球場には無情のサイレンが鳴り響く。結局菊川は12―4であっさりと初戦を勝ち抜いてしまった。

「やれやれ。これじゃあ抑えるのも一苦勞だなあ。だけど、僕達は彼らに勝ちたい」

「流石は王者菊川。だが俺は安土城を必ず頂点に連れて行く。それが男の信念だ」

「誰が来ようとか関係ねえ。俺は力で全てを制す！」

観戦に来ていた宮本、加田、宮沢もそれぞれに決意を新たにしている。それを知ってか知らずか、王者の軍団はグラウンドに母校の校歌を響かせていた。

その6

甲子園に賭ける、それぞれの思いは、試合の場以外でも、様々な決意の花を咲かせていく。それは真実にして現実。ゆえに敗北や悔しさから生まれる決意もそこにはある。敗北を機に咲く花と、排除を機に咲いた花。そのどちらもその本質に変わりは無く、それ故に輝けるものとなる。

勝負の継続をかけた最後の打者のスライディングは、わずかに届かず、彼らの夏は終わりを告げる。

「ゲームセット！」

球場に響き渡る審判の一声は、時には神の祝福に、そして時には無情なる死神による、断罪の宣告として球児たちの耳を突く。

勝者達のセレモニーが終わる頃、敗れしもの達は涙を流し、記念の土を袋に詰める。しかしその輪に加わらず、スコアボードをただひたすらににらみ続ける者がいた。

「チームでは負けたけど、俺は決して負けてない。またここへ戻ってくる」

まだ1年生なのか、顔立ちは幼い。しかし、目に力がある。

この試合に代打として出場、タイムリーを放ってチーム唯一の得点を挙げた少年だった。少年の眼は決意に満ち、そして輝いていた。それが後に結果となるかは別として。

上記が一例ならば、これもまた一例。これは、排除を機に一組の男女の間に咲いた花。

誰も居ない空間は、互いの決意を確認するのに最適な場だ。結果、必然としてそこに彼らの声はあった。

「約束……守ってね」

「ああ。必ず勝つ」

琉球水産（沖縄）のベンチ裏。2人の男女の間で交わされるのは短い言葉。しかしそこには溢れんばかりの互いの意思がこもっていた。

「沖縄に荒削りだが、素質十分の捕手がいる」

プロのスカウトの間で、そして野球記者の間でその噂は耳にしていた。しかし、古川が実際に目にしたその男は、彼の予想をはるかに超えていた。

「慶良間隆一、まさかこれほどとはな」
けらまりゆういち

琉球水産の1回戦の終了後、彼はこう呟いていた。

ある1つの事件を機に生まれた、今の慶良間を突き動かす意志。

（約束したんだ。だから、負けるわけにはいかない）

それが生まれたのはわずか数ヶ月前。それ以来徹底的に努力を積み重ね、その力でもって＜南の名門＞琉球水産を甲子園に蘇らせる原動力となるまでに自身を成長させた。そして今も、その意志は絶えない。

「点は取られても命までは取られない。安心して投げろ」

2回裏、2－1に迫られ、なおもツアウトラナ―2，3塁のピンチ。彼はマウンドへ行き、投手に活を入れる。そしてそれは効を奏し、次の打者はセンターフライに倒れた。

琉球水産ベンチ内。スコアラ―の女は、『あの日』の言葉を思い出していた。

「頂点、見せてくれるの？」

「ああ。絶対だ」

あの日彼と交わした約束、私がそれを忘れることは無い。

『＜女性選手事前出場審査制度＞に基づき、具志川真紀選手を審査した結果、当選手の公式戦出場は相応に値せずと判断された。よっ

て、該当選手を出場させることは高野連規約違反となる』

無機質な文言でつづられた手紙によって絶たれた彼女の選手生命。泣き崩れた彼女を救ったのは慶良間、そして彼と交わした約束だった。

「あの日私はあなたに希望を託した。だから絶対、負けないで」

4回裏に迎えた慶良間の打席、彼女は心の中で願う。その願いに答えるかのように、彼はランナーを返す一撃を放った。

その7

試合は9回裏まで来ていた。5－2。琉球水産の勝利はほぼ確実ながら、慶良間の瞳から力が失われることは無い。

「……」

具志川も、まだ決着は付いてないとにかくに、無言でグラウンドを見つめている。

「ストライク、バッターアウト！ ゲームセット！」

最後の1球がミットに突き刺さり、審判のコールが響くと、慶良間は彼女に向けて小さくガッツポーズをし、彼女もまた、それに答えた。

琉球水産の甲子園、そして、2人の希望はまだまだ続くのだ。

古川は試合記事をまとめつつ、こんな感想を漏らした。

「慶良間は確実に急成長している。この大会で一躍注目されるだろうな。まだまだ夏は盛り上がりそうだ」

甲子園はその日全ての試合を終え、闇に包まれようとしていた。闘いに間隙を与える黒雲をはらみつっ。

その翌日。甲子園のグラウンドも、月刊HBのオフィスの窓も雨に濡れていた。

「今日は色々注目していた試合があったがな。まあ、たまっていた記事进行处理するには都合が良い」

ここぞとばかりに記事の清書に精を出す古川に1人の女性が声をかける。

「古川さんって、どこの学校が優勝すると思っているんですか？」
流れるような長い髪が美しい、その女性の名は沢井春香。つい最近入社したばかりの新米である。古川は思わぬ仕事の妨げに苛立ちながらも、テストとばかりに質問で返す。

「じゃ、沢井さんはどこだと思ってるんだ？」

彼女は首をかしげ、少し間をおいてから、答えた。

「ひとつには絞れません。ただ……、候補は数校。北龍、天理天道、それに、昇竜国際。あと、春堂、総城も」

彼女視点の候補を挙げ、一つ一つに理由を述べていく沢井。その確さに古川も思わず仕事を忘れて聞き入り、舌を巻いた。

「……。驚いたよ。よく調べたね」

全ての説明が終わった後、古川は自身が質問されていた事も忘れて彼女に賞賛を送る。実際それほどのものだったのだ。

「昔から高校野球が好きでして……」

笑顔がほころぶ彼女。その笑顔も花のようで、なかなか美しい。そして彼女はそのまま熱弁を始めた。

＜三島世代＞に惹かれた高校野球との出会いから、＜ザ・チャレンジャーズ＞、＜爆砲世代＞と休むことなく語り続ける彼女にあきれながら、彼は呟いた。

「明日からこいつを連れて行こう……。経験を積みばいい記者になる」

記者たちがそれぞれの意見を戦わせる一方、球児達はそれぞれにこの間隙を利用していた。

激しい雨の中、室内から聞こえる打球音が途絶えることは無い。

「まだだ！ 後百球はいくぞ！ 雨でも練習は手を抜くな！」

チームメイト達に檄を飛ばしながらバットを振るのは安土城学園（滋賀）主将、＜近江の闘将＞加田茂。彼らはこの日、宿舍の近くの学校で室内練習を行っていた。

（上に行く為には、もっと自分を鍛えねば……）

バットを振れば振るほど、彼の場合は強まっていく。果て無き打球音が、彼らの意思を告げていた。

「吉永君、香川君の様子はとうですか」

春堂高校室内練習場。監督が投手陣の練習を見ていた吉永に声をかける。

ちなみに、春堂では、キャプテンはチームのまとめ役として、監督とのパイプをつなぐ役割に徹することになる。

また、キャプテンには秋大会の2年の控えから、一番練習に全力を尽くしていた者が選ばれる。

これは、実力主義を重んずる春堂において、下の者にもチームの一員としての光を与え、それと同時にレギュラーに彼らの価値を実感させることで、意味の無い足の引っ張り合いを防ぐ効果を持つ。

そして、キャプテンを中間に置くことで、チームの問題を監督へ持ち込む前に自分達で解決させ、チームワークを生み出す効果もかねていた。

「難しいですね。自信を失っています。むしろ神楽の方が調子を上げています」

吉永は冷静に事実のみを告げた。

「そうですか……。後で明日のメンバーを決めますので、私の所へ来て下さい」

「分かりました」

監督は去っていく。おそらく打者を見に行くのだろう。

(2回戦の相手は昇竜国際。勝つ為とはいえ、監督も大変だな)

思いを押し殺し、吉永は投球練習に再び目を向けた。

カーテンに覆われ、暗い室内は2人の心の中を示すのか。しかし、その中に声は聞こえる。

「これが、私の勝つ為の決断です。後は、頼みました」

「はい……」

吉永に手渡されたメモ。そこには大きく賭け>が記されていた。やむことを知らぬ雨の中、鈴木友雅は外出していた。

(練習はオフ。リフレッシュだ)

街へ繰り出し、冷やかに店を見て回る。そして、彼の心は、研ぎ澄まされる。

「春堂高、おそらく一筋縄ではいかない相手だ。しかし、俺が、そして打撃陣が打てば良い」

雨の中、それぞれの思いは巡る。そして雨がやみ、夜が明けて、夏晴れの空が彼らを照らす。

「さあ、行こうか」

「ええ、楽しみです」

古川も沢井と共に、甲子園へ向かう。今日からまた、激闘が始まるのだ。

その7（後書き）

次回より『風雲編』突入です。自サイトよりの転載ですので、更新は早めの予定です。

第二章 風雲編その1 本物の野球

沢井は、後悔していた。

ずっと追いかけて、ようやくたどり着いたテレビや雑誌の世界ではない、本物の高校野球。それは、彼女の想像をはるかに越えていた。
(何なの、これ……。すご過ぎるよ……)

彼女の呆然とする姿を古川は面白そうに見ていた。

(最初は俺もこうだった。懐かしいな)

古川の眼前では、＜近江の闘将＞率いる安土城学園の試合が展開されていた。

サードに立つ大柄な男が、見事なダイビングキャッチを見せる。

ユニフォームは土にまみれたが、男は誇らしく立ち上がる。

「サードの加田、3塁線を抜けそうな当たりを見事にキャッチ。安土城学園、3回裏ツーアウトランナー3塁のピンチをしのぎました」
好プレーに観客が沸き返る中、安土城ナインはベンチ前で円陣を組む。その中心には、侍の空気をまとう男。＜近江の闘将＞加田茂である。

「いいか。相手は名門。簡単には勝てん。3塁への当たりは俺がしつかり捕るから、とにかくワンチャンスを生かすんだ」

「ウス！」

加田の檄を胸に、チームは結束する。彼らの瞳は、加田への絶大なる信頼と、勝利への強い意志で満ちていた。

5回表、安土城は執念でチャンスを作り出し、ワンアウトランナー3塁の状況で加田に打席を回す。

「沢井、よく見る。あれが、＜近江の闘将＞だ」

試合に圧倒され、口を開けたままの沢井に、古川が声をかける。

(皆、よくやった。ここは俺が返す！)

加田の目に炎が灯る。そして相手側もそれを察した。初球は外角

低目。しかし……

「甘い」

バットは刃に姿を変え、空気を切り裂く。そして白球は鋭く1塁線を抜けた。

「先制、先制です！ 加田、渾身の一打でランナーを返しました」
「すごい……」

沢井は思わず呟いた。彼女の目にも、加田のバットは刃に見えた。今まで読み漁った雑誌や、毎年食い入るように見ていたテレビには無い本物の迫力。それは確かに、本物の野球に対する理解となって彼女の心を貫いた。

その後も加田は緊張を緩めない。要所要所で投手に声をかけ、ピッチになれば守備陣に檄を放つ。そして常に全力のプレーでチームを、そして観客を盛り上げる。

そして9回裏、この試合最後の打球が加田のグラブに納まった時、ガッツポーズで彼は吠え、沢井は思わず自分が記者だということも忘れて歓声を上げていた。

その2

「これは……。賭けに出たな」

昨日の雨が嘘のような夏晴れの元行われる大会8日目第3試合。
オーダー発表に古川は衝撃を受けた。

「時間だ。行こう」

神楽泰治。

「ああ。仕事の時間だ」

勝田俊介。
かつたしゅんすけ

「よっしゃ、一丁暴れるかあ！」
くさかしゅうま

久坂主馬。

昇竜国際（東東京）―春堂（大阪）

春堂にとって、正念場というべきこの試合に、彼らはあの1年生
3人を最初から投入したのだ。

「今の状況で打てる手は打ちました。後は、勝利を祈るだけです」
監督の呟きが、選手達の去ったベンチに小さく残った。

「ふうん。こりゃ面白え事になったな。ま、鈴木勝ちだろうがな」
満員のスタンドにまぎれて宮沢はこの試合を見ていた。直前の第
2試合で相手校を7回無失点、13奪三振で切り捨てたく西の奪三
振王は、次の相手となるであろう昇竜国際、そして鈴木友雅を見
に来ていた。

1塁側アルプスの歓声が、聴覚を破壊せんとする勢いで甲子園中
に響く。両者無得点のまま来た4回表、昇竜国際はノーアウトラン
ナー2塁の状況で鈴木に打順を回す。

「くう……」

神楽が小さく唸る。第1打席では何とか外野フライに抑えたが、後一步でスタンドだった。

（気合を込めろ。ここだ！）

捕手のサインは強気の内角。

「迷えば絶対に打たれる。ここは勝負だ！ 行け！」

神楽も当然、全力で投げ込む。ボールは鋭く内角へ食い込んだ。しかし、相手は甘くなかった。

「いい球だったが……。まだまだだな」

白球がスタンドへ飛び込み、観客の歓声が球場を揺るがす。その中を贅肉のない、均整の取れた体を揺らして静かに回りながら、鈴木は呟いた。それは、正直な感想。実際、鋭く食い込んで来たあのボールは、チームの他の打者では打てなかっただろう。彼は、その後無言のままホームへとたどりついた。

「かあー。甘い甘い。あのコース、俺なら三振取れるぜ。つうか、かすらせもしねえ」

スタンドに乱暴に座り、悪態をつく宮沢。その目は溢れんばかりの自信で輝いている。そこへ声をかける大柄な男が1人。

「ほう。あの鈴木相手に余裕だな」

「押本……！」

宮沢が立ち上がり、2人が目を合わせる。一瞬、眼光が交わる。そして次の瞬間、両者が共に目をそらす。まさにライバル意識の衝突である。

「なぜ、ここに来た」

先に声を発したのは宮沢。

「当たり前だ。勝ち進めば抽選によってはこのブロックの勝者と当たるからな。上に行くためには、今から手を抜くわけにはいかない」押本は冷静に切り返す。

「ほう。初戦であれだけ苦戦した奴の言葉とは思えねえな」

「俺が目指すのはもう、頂点しかないからな」

「そうか……。だったら、俺がお前を倒して止めてやるよ」

宮沢の目が野獣のように光を放つ。

「なるほど。その宣戦布告、受けたぞ」

そう言うのと押本は背を向け、宮沢の前から去っていく。

「ち。乗せられちゃったな」

宮沢も再び、乱暴に椅子に座り込んだ。試合は5回裏まで進んでいた。

5回裏の攻撃直前、春堂ベンチでは不穏な会話がささやかれていた。

「よくこらえたな」

「冗談じゃない。もう2、3点取られてもおかしくなかった」

勝田の声に神楽がぼやくと、勝田は彼の肩を軽くたたいた。

「まあ、攻撃は任せろ。奴ら、意外と守備は穴だらけだ」

「ふん。俺が一発かませば良いだけよ」

久坂も割って入る。春堂の反攻は、水面下で既に始まっていた。

その3勝負の果てに……

「さて、『仕事』をしに行くか」

5回裏、先頭バッターは今日は2番に座る勝田。その目はピッチャーマウンドを冷たくにらんでいる。そしてここから、春堂の反撃が始まる。

試合は、突如として修羅場を迎えた。先頭バッターの勝田が、ピッチャーの足元を抜くセンター前ヒットから次の打者への初球を盗塁。その後送りバントで3塁へ進み、4番を迎えたところで昇竜内野陣がマウンドに集まる。

「どうする、4番と勝負するか？」

鈴木が問う。それに対し投手は驚くほどはつきりと答えた。

「いや。敬遠する。5番の方がまだ抑えられる」

「そうか、任せた。俺達は守るだけだ。散れ！」

鈴木 of 指示で内野選手が守備位置に戻り、投手は自らの決意に従う。そして、それに一番反応したのが、当の5番打者、久坂だった。

「やりやがったな……。思い知らせてやる！」

とても1年とは思えない傲慢な怒りを込めて振ったバットが白球を捕らえ、その白球は空気を切り裂き、スタンドに突き刺さった。

「あの男は、怒れば怒る程力を発揮する。敬遠は失敗だったな」

ホームに戻った勝田が、静かに呟いた。

結局この後、春堂は投手交代の隙を付いてさらに1点を加え、4―2と完全に試合をひっくり返した。

「おいおい。ピッチャーだらしねえなあ。それにしても……。春堂の連中、意外とやるねえ。まあ、相手になっても叩き潰すだけだな」

宮沢はスタンドで冷ややかに彼らを切り捨てた。

記者席で古川はあきれ返っていた。

「やれやれ、彼らの可能性は果てしないな」

「でも、これが彼らの魅力だと思います」

沢井がその姿を見て口を挟む。もうすっかり球場の空気には慣れたようだ。

「む……。言われなくとも分かっているからな」

「あ、すみません」

冷たく流され沢井は少し落ち込む。そこに、背後から一つの声が割り込んだ。

「おいおい、別嬪さんをいじめちゃあいけねえなあ」

その声に古川は信じられないといった様子で声の主のいる方角を見た。

「あ、あなたは……」

古川はただただ立ち尽くしていた。

「鈴木！　せめてもう一発頼む！」

「先輩！　お願いします！」

ベンチからの応援と、スタンドからの耳をつんざく大歓声を背に、9回表、鈴木友雅はおそらく大会最後となるであろう打席に立つ。その過程で彼は一瞬歩みを止め、電光掲示板を見る。

1 2 3 4 5 6 7 8 T

昇 0 0 0 2 0 0 0 0 2

春 0 0 0 0 4 2 2 1 9

（投手陣の実力不足を切り崩され大量失点、打撃陣は俺の第3打席も含めてヒットは出ても要所を締められ、結局俺の2点止まり……。春堂高、間違いなく強い。だが、ただでは負けん！）

己の意思を強固に固め、彼はバッターボックスに入る。その目はしっかりと神楽を見ている。

（呼んでいる。世代最強のスラッガーが、俺を呼んでいる）

神楽はその意思を悟る。心が揺れ、唇が乾く。しかし、それをねじ伏せ、彼は決断する。

「まだ敵わないだろうけど、行こう。全力で、勝負だ」

歓声が遠退き、頭の中が澄んでいく。神楽はその右腕を鎌に変え、力の限り振り下ろした。

そして数分後、その結末にもかかわらず、空は青く澄んでいた。

「負けたか」。だが、悔いは無い」

自分の、そしてチームの最後の意地をかけたあの打席、彼を撃ち抜いたのは、ホームランの時と同じコースの、しかし威力はそれを上回るストレートだった。

チームメイトが涙を流し、土を集める中、鈴木は一人、天を仰いでいた。

「土も、涙も、俺にはいらぬ。この清々しい気持ちだけを持ち帰り、次への糧としよう」

決意もむなしく、頬を涙が伝う。しかし、空はどこまでも、どこまでも青かった。

その4 『新球』

「あー……、疲れた」

試合終了後、クールダウン、インタビューを終えた神楽が今にも死にそうな声でばやく。おそらくは集中力を使い切ったのだろう。

「ったく、よく言うぜ。俺達を散々動かしといて」

「はははは！」

そこに久坂が横槍を入れ、皆が明るく笑う。試合の内容はともかく、今は誰もが勝利の喜びに浸りたかった。

「春堂か……。ま、あの程度ならどうにでもなるだろ。さて、戻って練習するか」

己の予想を裏切る結果にもかかわらず、宮沢は冷静を保ち、そのまま球場を去る。その姿を目にした押本が言葉を残す。

「宮沢が春堂をなめたままだったら、面白いものが見れそうだったが、あの様子だと、それはもう無いな」

その声は寂しそうでもあり、ライバルの真剣さを喜ぶ様でもあった。

第3試合の衝撃もそこには時は流れ、宮本率いる佐渡島の登場した第4試合、またしても彼の芸術が観客を沸かせる。しかし相手は仮にも甲子園までたどり着いた、県の代表校。翻弄されながらもランナーを出し、追い詰める。

「仕方ないなあ。未完成だけど『あれ』、使うか」

4回表。ツーアウトランナー2塁の状況に彼は決意する。しかし、投げ始めたそのフォームに変わりはない。そして、放たれた球にも（いつもの遅いストレート。もらった！）

球の速さから球種を確信した打者がバットを出す。だが、球は手元でわずかに変化する。

（え?!）

芯で捕らえるはずだった球は鈍い打球音をバットに与えてグラウ

ンドに転がった。

「あれは、もしか……。手強い男だ」

そのシーンを見た押本が呟く。彼は宮本をく投手の一つの形として認め、できることなら闘いたいとさえ思っている。しかし、そのときの展開を想像すると、彼の心は静かに震えた。

「ようやく見れたか。宮本の『新球』」

満足そうに語る古川の横で、沢井が隣に座ってしまった先ほどの声の主を手で示して言う。

「あの、こちらの方は一体……」

「後で話すから、とりあえず失礼の無いように頼む」

「はあ……」

古川が冷たく質問をはね返した横で、1人の老人が、何か言いたそうにこちらを見ていた。

その後も宮本は『新球』の幻影と変化球、直球を巧みに使い分け、8回まで無失点で到達する。

その間、佐渡島はいつものように足と粘り、バットコントロールで攻め続け、何とか2点を奪う。

しかし9回直前。

（ん？ 右腕が……）

宮本がその右腕にく何かを感じ取る。

「どうした？」

仲間が声をかけるが宮本は笑って返す。

「いや、何でもないよ。大丈夫」

彼は明るく言い切った。しかし、そこにはわずかな影があった。

その5 それぞれの夜

「まったく、貴様は全然変わっておらん！」

第4試合終了後、ある酒場で会合を持つことにした古川と沢井、そして謎の老人。しかし、その会合は老人の怒鳴り声から始まった。もう70近い容姿にもかかわらず、眼光は鋭く、怒るその姿はまるで修羅のようだった。

その後も老人は怒鳴り続け、ようやく落ち着いたのは1時間も経った後だった。

「ふう。一通り言ったらすっきりしたわい。ところで……古川、あの9回のピッチングはどう見た？」

「やはり、そう思いましたか。まだ目は衰えてませんね」

やれやれといった表情をした古川の思いを知ってか知らずか、笑顔を見せる老人。と、そこへ沢井が口を挟む。

「で、結局この方はどういう……」

「おうおう。まだ自己紹介してなかったのう。わしの名は小林靖男じゃ。詳しくは古川から聞け。それでも昔はすごかったんじゃ」

「そうなんですか？ 古川さん」

「ああ……」

小林靖男。かつて伝説のスポーツ記者として名を知られ、甲子園の名勝負には必ず彼の姿があったとさえ言われている。そして、彼が最後に鍛えた人物こそ、古川巧その人であった。

夜は誰にも訪れる。そしてその使い方は各人次第である。

北龍高宿舎。押本は1人自室にこもっていた。

（9回表、宮本の投球は明らかに精彩を欠いていた。もし、奴の腕に異変があったとしたら……）

そこまで考えて彼は立ち上がる。そして、不吉な予感を振り払うかのように、カーテンを開け、窓も開ける。空には月が輝いていた。「散るなよ……」

かすかに聞こえたそれは、大会最速の豪腕から、大会最強の技巧派へ送られたエールだった。

「鈴木先輩、まだ部屋から出ないのか？」

「ああ。よっぽど悔しいんだろうな」

昇竜国際宿舍、鈴木の部屋の外で交わされる会話。しかし、雑音を無視するかのごとく、鈴木はバットを振っていた。

（もう次のステージは始まっている。出遅れは許されない）

敗北の記憶を打ち消すように振られるバットは、早くも木製のそれになっていた。

宿舍の部屋の中、宮本は己の右腕を見ていた。医者に見せてはみたものの、どうも状況は芳しくないようだ。

（今日はとりあえずもってくれた。でも……、次の保証はないし、1点取られるようじゃどうにもならない。どうする？）

彼の心は、迷いの中に沈んでいた。

夜も更けた春堂高合宿所、監督と吉沢は、なおも勝利を求めて動いていた。

「とりあえず、今日はしのげましたね」

「ええ。ですが、今回の件で、チームにわずかですが、わだかまりが……」

「そうですか。今は大会中ですし、私が皆を説得しましょう。いいですね」

「分かりました」

わずかな不安を押し殺し、2人はチームの為に動き続けた。

闇の中、その声は確かに響いていた。

「フンッ！ フンッ！」

宮沢はもう3時間もシャドウピッチングを続けていた。額からは汗が流れ落ち、シャツはもう汗まみれになっている。しかし、彼は気にも留めずに動作を続ける。

（春堂は俺がきっちりと潰してやる。そして俺は押本を止める！）
確かな決意の元に、彼は動き出していた。

そしてまた、夜が明ける。

その6 己が力——見せる者、危惧する者——

「く……。二日酔いか」

早朝5時。目覚まし時計にせかされて目を覚ました古川を待っていたのは、強烈な頭痛だった。確実に昨日の酒が原因だ。

しかし、外は快晴。仕事は休めない。彼は鎮痛剤で痛みを無理やり押さえ込むと、仕事場——甲子園へと、足取りも重く向かった。

「小林さん。何で今日も……」

「あん？ 昨日、わしの方であの新米の面倒見てやるって言ったじやねえか」

甲子園のスタンド。今日もなぜかいる小林に疑問を挟んだ古川は頭痛と共に昨日の記憶を蘇らせた。

「ああ……。言っていましたね。そして、OK出しますね」

だろう、と言いたげな顔で古川を見る小林。しばらくして、頭を押さえつつ沢井もやってくる。こうして、今日の観戦も始まるのだった。

＜天才＞……。そう呼ばれるようになってから、どれほどの時が経っただろうか。

リトルリーグ、そしてシニアリーグでその名を轟かせた男、前田悟は、愛知の名門、中京崇城のユニフォームに身を包み、当然のようにレギュラーを奪って今年の甲子園に参戦、先日初戦では勝利を決定付けるタイムリーを放っていた。

しかし、2戦目となったこの日の第1試合。彼はさらに強烈なパフォーマンスを観客に見せ付けた。

美しい打撃フォームから放たれた一撃が、ピッチャーの頭上を貫いていく。

「あっと、打ちました！ センター前に落ちる！ ランナー帰って1点追加。6回表中京崇城、3―1と再び突き放します。＜天才＞、今日は絶好調の3安打！」

追加点に盛り上がる中京崇城側スタンド。しかし前田はさも当然かのように1塁ベースに立っていた。

「さすがは＜天才＞。あの程度なら当然、か」

「そんなにすごいんですか？ 彼は」

記者席で感想を言う古川に沢井が問う。

「これを見りゃええ。奴のシニアでの全成績だ」

そこに2人の右隣から割って入った小林が数枚の紙を差し出す。

「あ、ありがとうございます。……って、何ですかこの成績は！？ 全国の強豪を相手にしていてもシニアの通算打率7割以上って……」

紙を見た沢井が驚愕する。そして、さらに読み進めると、もう1つ驚くことになった。

「こ、これって……。もう化け物じゃないですか！」

開いた口がふさがらない彼女に向けてそうだと言わんばかりに2人がうなずいた。

5―2で迎え、中京崇城の楽勝ムードが漂っていたはずの9回裏、マウンドに立つエースナンバーの顔がこわばっていた。

疲れから打ち込まれて1点を奪われ、なおもツアアウトランナー1、2塁。長打で同点、本塁打でサヨナラの大ピンチとなっていた。（仕方ない、ここは奴に頼ろう）

「タイム！」

ついにここで中京崇城ベンチから伝令が飛び出す。そして、恐るべき事態が発生した。

数分後、スタンドはいまだざわめきに包まれていた。マウンドに

立ったのは先ほどまでレフトにいた前田。この場面での1年の起用に誰もが驚きを隠せない中、彼は冷静だった。

（さてと。まあ、1球投げ込んでみるか）

細身の体をしっかりと操り、淡々と、しかし迫力を持ったフォームで、彼はボールを放つ。そしてその球は一瞬でマウンドとホームを切り裂き、スピードガンは142キロを記録した。

「高校初のマウンドが甲子園でも関係なし、か……」

スタンドの古川が呟く。そして、沢井も続いた。

「シニア時代の通算防御率1点台。その力が、これなんですね」

「わしも長年見てきたが、このタイプはあまりに少ない。まさに<天才>じゃ」

小林もやれやれとため息をついた。

「さてと。もう1球行くか」

再びそのフォームから球が放たれる。外角一杯のストライクに入り、今度は145キロを記録する。もはや観客は静まるのみ。ブラスバンドの応援も空しく響く。

（と、とにかく当てるんだ。三振だけは避けないと……）

バッターボックスを外し、呼吸を整える相手打者。だが、その行為も<天才>の前には無に等しい。

（甘いね。これで、終わりだ）

最後の1球が放たれる。そのフォームは過去2球と、まったく同じ。しかしその球の前に、バットは空しく空を切った。

「古川さん、あの球は……」

「彼の決め球チェンジアップ。しかもフォームは直球とまったく同じ。故に空振りする」

「なるほど……」

1年とはとても思えないそのマウンドさばきに、沢井は息を呑むことしかできなかった。

春堂高合宿所。神楽はこれまで見ていた、中京戦のテレビを消して呟く。

「あーあ。やっぱり俺より上かあ」

「まあ、仕方ない。あちらは才能のかたまりだ」

そこに勝田が追い討ちをかける。

「そうは言ってもな……。あ、ミーティングの時間だな。行かないと」

「そうだな」

勝田をさえぎり、走り出す神楽、そして勝田はそれを追う。

「あの球威にあのチェンジアップ。そう簡単には打てないだろう。だが、穴はあった。1つだけだが、それを見抜けば、とてつもなく大きい」

勝田のわずかな呟きが、そこに少しだけ残った。

「おい、次の相手は中京崇城に決まったぞ」

佐渡島の宿舎。ランニングから戻ってきた宮本に、仲間の1人が言う。

「うん、分かった。後でテープを見せて」

「了解」

仲間の応答を背に、笑顔で自室へ向かう宮本。しかしその顔は、わずかに引きつっていた。

「大会前から予想していたとはいえ、相手は＜天才＞。さて、どうしようか……」

かすかな不安が、彼を苦しめていた。

9回表、最後の1球がミットに入ると同時に、エースは淡々とマウンドを降りた。

「まだ2つ勝っただけ。だが、必ず天下を取る。誰にも止めさせない」

冷静な表情の裏に、確かな決意と野望を忍ばせて、押本は頂点のみをただひたすらに目指す。最終結果は14―2。チームも彼を後押ししているかのような戦いぶりだった。

去年の夏、その男の闘いを見て体が震えた。そして1年後の今、その男への挑戦権が手に入ろうとしている。

阪神翼陵高校（兵庫）2年、谷岡昭文。チームの次世代を担うべき俊足巧打の1番打者の憧れは、今大会最高クラスの右腕、押本神威その人だった。

（後1球、これで……。あの人に挑める！）

9回裏、最後の打者がツーストライクに追い込まれると、セカンドで彼は心の中で喜びをかみ締めた。しかし、相手とて県の代表校。その最後の1球に闘志を見せる。バットが球を捕らえ、濁った打球音と共に白球が、彼の守備位置へ転がる。

「！」

一瞬反応が遅れた谷岡。だが、素早くボールをキャッチすると体勢を崩しつつも1塁へ投げ、打者を寸前で仕留める。

「ゲームセット！」

審判の声が響いた瞬間、汗と土にまみれ続けた彼の心は歓喜に溢れていた。

「谷本か。今年はまだまだだが、来年は要注意だな」

「ああ。わしもそう思う。さてと、明日からは三回戦、どんな闘いが見れるのかのう」

「ええ。楽しみです」

記者席の3人もそれぞれに感想を語り、各試合をまとめだす。その日の夕焼けは、今後の激闘を予感させるかのように真っ赤に染まっていた。

その7 夢の架け橋

大会10日目、3回戦に突入した激闘は、さらに壮絶さを増していく。その中で第1試合に登場した総城学園は、苦戦しながらもベスト8の1番乗りを果たした。

しかし第3試合、春の王者が窮地に追い込まれる。

「8回を終えて現在3―1。選抜覇者菊川昭栄、とうとう追い込まれました！」

「ここで真の実力が試されますね。菊川は」

「そうじゃのう」

スタンドの古川、小林も眼が離せないといった様子でグラウンドを見る。しかし、9回裏、彼らは信じられない事態と遭遇する事になる。

9回裏。ツーアウト1、3塁。ツーアウトまでは手も足も出なかった彼らだが、そこから四球で出塁すると、次の打者が長打を放ち、この最後にして最大のチャンスを引き込んだ。同点へ、逆転へ、必死の声援を送るスタンド。しかし、菊川の監督はここで代打を送り込む。それはなんと、今夏初打席の選手だった。

「普通はまずこんなことないですよ。まさか……勝負を諦めてしまったのでしょうか？」

沢井が問うが、小林がそれを即座に否定する。

「いや、違うな。奴ら、恐らく切り札を送り込みやがった。よく見る。あの代打の目は決して死んでない。何かが起こるぞ。わしの勘だな」

その発言はある意味菊川らしいと言える、最も衝撃的な形で実現することになった。

天駆ける白球が、風に乗ってスタンドに飛び込む。その瞬間、試

合は、あまりにも出来過ぎで、そして壮絶な幕切れを迎えた。勝者となった者にも、敗者とされた者にも、信じられない事態。だが、時に事実は恐ろしい物を生み出すのだ。

「まさか、サヨナラホームランとはな……」

興奮に沸くスタンドの中で、古川が呆然として呟く。カウント2―1から、内角へ放たれた白球を思い切りすくい上げた一撃。それは風に乗り、菊川昭栄の夢をつなぐ架け橋となったのだった。

高校野球史に、間違いなく名を残すであろう逆転劇を成し遂げた彼らは、喜びに溢れた顔で自らの校歌を斉唱していた。確かな王者の姿が、そこにはあった。

「菊川昭栄、やはり強い。だが、隙はある。『高校野球』をすれば勝てる。絶対に勝てる」

「なるほど。頂点への障害のひとつにはなりうるな。だが、決して道は譲らん」

スタンドから観戦していた春田が、押本が、改めて己の意思を強く固にする。夢をつなぐ架け橋は、一方でさらなる激闘を招く使者ともなりつつあった。

11

その8 激突!

安土城学園宿舍。闇に染まった室内で、黙想にふける男が1人。
(今日勝てば後3つ。そろそろ時間だな)

男が目を開ける。その目は鋭く光り、強い意志を感じさせる。
「行くか」

男は立ち上がる。彼の向かう先には共に戦う同志達がいる。安土城学園野球部主将、加田茂の闘いは、既に始まっていた。

「約束の為に、絶対に、勝つ。勝つんだ」

甲子園の空に向かって1人呟く慶良間隆一。その目には熱き魂がこもっている。やがて視線を戻し、球場に入る慶良間の後姿に、具志川があの日から少し伸びた髪を風になびかせながら、憂いを込めた目を向ける。

(お願い、勝ち続けて……)

目標と約束。願いと誓い。

それぞれの思いから頂点のみに焦点を定めた男2人が、その勝敗を分かつのは――

大会11日目第1試合

琉球水産(沖縄)―安土城学園(滋賀)

＜近江の闘将＞と急成長中の有力捕手。2人の激突は昨日のハイライトテレビでも注目され、大勢の観客が朝早くから詰め掛けた。そして1回裏の安土城の攻撃、早くも試合は動く。ツアアウトからチーム初ヒットが飛び出して4番の加田が打席に立つ。

「……」

盛り上がる自軍スタンドを背景に、加田は侍の雰囲気をもとって

ボックスに入る。

(なるほど。すさまじい殺気だ)

その姿に慶良間は戦慄を覚えた。思わず体が震えそうになる。

(だが、抑えなければ勝ちはない！ 来い！)

ミットを叩いて自身と投手に気合を入れ、大きく内角へ構える。そして球はそこに狂うことなく襲い掛かる。

(内角低めにドンピシャ！ これならいける！ 絶対にいける！)

空振りを確信する慶良間。だが、その瞬間、加田の殺気が彼を襲った。

(！)

彼は一瞬、自らが斬られた錯覚を覚えた。しかし、加田のバットは慶良間ではなく、白球を捕らえていた。

甲高い音を残して白球は空を駆ける。そして、ランナーは2塁からホームへと向かう。

「バックホーム！」

大声で指示を飛ばす慶良間。その指示に答えるかの如く、球はホームへ返される。それをしっかりと捕球する。

だが、ランナーはためらい無くスライディングで突っ込む。

(加田の打ったこの一撃、無駄にはしねえ！)

「真っ向勝負か！ 来い！ 俺は勝つ！」

その姿にグローブを構えて立ち向かう慶良間。2人がぶつかり、土煙が舞い上がる。

いくばくかの間の後、土煙が晴れ、現れた2人の姿。そのとき、慶良間のグローブからボールは零れ落ちていた。

「セーフ、セーフ！ 安土城学園、思い切りの良いスライディングで先制点を奪いました！」

「よし！」

2塁上でガッツポーズをする加田。しかし、激闘はまだ、始まったばかりだった。

加田のタイムリーの後には後続が絶たれ、1―0のまま迎えた3回表、8番に座る慶良間がこの試合初の打席に立つ。ここまでノーヒットの琉球水産打線。初ヒットへの期待にスタンドが沸く。

「……」

無言のまま打席に入る慶良間。その目線はサードを守る加田に向けられている。

（安土城は奴が核。早いうちに奴を破る！　そして勝つ！）

そして――

「慶良間打った！　打球は加田の頭上！　ジャンプはわずかに届かない！　琉球水産、初ヒットが長打になりました！」

「っしゃああ！」

2塁に滑り込み、雄叫びを上げる慶良間。してやったりと、笑みが浮かぶ。そしてこの直後、タイムリーが出て彼は同点のホームを踏む。

「なるほどな……」

ホームに帰り着く慶良間を見ながら、加田が呟いた。

「貴様には俺と同じ臭いを感じる」

4回裏、ランナーを1人置いて再び迎えた加田の打席。突然加田が慶良間に話しかけた。だが、慶良間はそれを無視してミットを構える。

「無視か……。まあいい。男とは、そういうものだ」

彼の視線は自軍ベンチに向けられていた。

2年前――。

加田は、強肩強打のサードとして、数々の名門校から誘われているが、それを蹴り、苦楽を共にしたシニアの仲間達と共に安土城学園に進学した。決して強い学校ではなかったが、互いにこの誓いを立て、猛練習を積んだ。

＜こうして同じ学校に来たからには、頂点に立つ＞

そして彼の存在は、各地の優秀な下級生達を引き寄せ、今年ついに甲子園への道を開いたのだ。

（誓いを守るは男の定め。だからこそ、同じ臭いの貴様は倒す！）
「喝！」

その一声と共に バットはまたしても白刃と化し、思いを込めた打球が、バックスクリーンに突き刺さった。

（何もかも無くなった……。約束も、今年の夏も……。）
歓声が遠い。何も聞こえない。慶良間はただ立ち尽くしていた。

1 2 3 4 5 6 7 8 9 T
琉 0 0 1 0 0 0 0 1 0 2
安 1 0 0 2 0 1 1 1 X 6

彼のリードはことごとく安土城ナインの結束と執念の前に破られ、反撃はわずかに8回表に彼が執念で打ったタイムリーのみ。

「……」

無言で慶良間の後姿を見る、具志川の目にも涙がたまっていた。

「そういうことか……」

3塁側ベンチで様子を見ていた加田が、かすかに呟いた。

（約束とは難しいものだ。だが、今回は俺達が勝った。それだけだ。その悔しさは大切にしておけ）

彼は後ろを向くと、そのままベンチを後にした。

その9 思惑のさなかに――奪三振王、本領発揮――（前書き）

約2ヵ月ぶりの投稿になってしまいました。大変申し訳ありませんでした。

その9 思惑のさなかに――奪三振王、本領発揮――

「負け……、ちゃった」

琉球水産ベンチ裏。具志川は泣き崩れていた。

「く……」

慶良間はその姿を直視できない。彼女に慰めの声をかけるチームメイト。しかし、彼はその輪に加われなかった。

（約束を破った男に、彼女を慰める資格など、ない）
彼は拳を握り締め、その場を離れた。

「最終的に点差は開いたが、実力に大して差はなかったな」
スタンドで振り返る古川。その視線の先では、準々決勝の抽選が始まろうとしていた。

その数分後。組み合わせは以下と決した。

大会12日目

第1試合 佐賀市商（佐賀）対〔天理天道学社（奈良）―春堂（大阪）〕の勝者

第2試合 安土城学園（滋賀）対〔北龍（南北海道）―阪神翼陵（兵庫）〕の勝者

第3試合 総城学園（茨城）対光志館（大分）

第4試合 菊川昭栄（静岡）対〔佐渡島（新潟）―中京崇城（愛知）〕の勝者

そして、それぞれの相手が決まった瞬間、各人の思惑が甲子園を

覆う。

（勝負は準決勝以降。だが、手は抜けないな）

総城監督、春田が。

（来たな。最大の正念場。なんとしてでも、勝つ！）

安土城、加田が。

（ふん、全員叩き潰すまで！）

天理天道、宮沢が。

（ついにこの次。だけど……）

右腕に目をやりつつ、佐渡島の宮本が。

（まあ、頑張ってみるか）

中京崇城の＜天才＞、前田が。

（安土城か……。面白い相手になったな。だがその前に、阪神翼陵だな）

北龍のエース、押本が。

（あの人の次なんて、考えてなかった。全力でぶつかるだけだ）

阪神翼陵、谷岡が。

しかし、その中でも時は流れる。

「監督。今日からは完投します」

そう言い残して、宮沢のスパイクが大地を踏む。

グラウンドの熱の高まりと共に、第2試合が近づいていた。

天理天道学社高校エース、宮沢誠也。ここまでの2試合、14イニングを投げて失点0。奪三振は27。そして3戦目となった春堂戦、いよいよ本領を発揮した彼の実力が猛威を振るった。

「な！」

鋭い目を持つ勝田が。

「ちっ！」

昇竜戦の活躍を買われて5番に入ったパワーヒッター久坂が、彼

の気迫の投球の前に、次々と斬り捨てられる。

その結果、打線は5回終了時点で宮沢にパーフェクトに抑えられ、正確無比のコントロールを持つ神楽も、天理天道に3点のリードを許していた。

「5回を終えて8三振。今日も相変わらずじゃのう」

記者席で飄々と小林が言い放つ。しかし、そこに沢井が疑問を投げかける。

「球速は押本の方が早いんですね。どうして彼の方が三振を取れるんですか？」

「ピッチャーというのは、球速だけじゃない。彼の場合は、直球の伸びと重さ、そして変化球のキレがその投球を恐ろしいものになっている」

会話に割り込んだ古川が、あっさりと、そして分かりやすくその疑問に答えた。

「なるほど……」

沢井はうなづくことしかできなかった。

「監督！ 俺達に行かせてください！」

春堂ベンチ。一部の選手達が騒ぎ始めていた。昇竜戦終了後のわけだかまりが、その後の監督の説得にもかかわらず、ここに来て吹き出してしまった。

1年生3人も、責任を感じているのか、何も言わない。

「むう……。どうでしょう」

監督は悩んでいた。このまま行くのか、それとも代打を出すのか。そこに吉永が声をかける。

「監督、このまま終わるくらいなら、ベンチも含めて全力で行きましょう」

その声を聞いた数秒後、監督が顔を上げる。その瞳に、苦悩の色はもう無い。

「ここからは私の采配に従ってもらいます。いいですね」

「ウス！」

今、チームがひとつになる。その声に背中を送り出されるかのように、監督は伝令を送り出した。そしてウグイス嬢の声が流れ出す。「春堂高校、選手の交代をお知らせします……」

「とっくに遅えよ。スイッチが入っちゃったからな」

その声を耳にしながら、宮沢は呟いた。

「くそおおお！ 何の役にも立てなかったじゃねえか！」

試合終了後、上級生達が記念の土を掘り返す中で、久坂は地面をその拳で叩いていた。悔しさがあふれ出し、地面の色が変わっていく。そこへ不意に背後から1本の腕が伸び、彼の顔を上げさせる。

「泣くなどと言わん。残り2年で強くなり、また戻ってこればいい。その時にこそ、頂点に立つんだ。俺達の手で」

勝田だった。見れば彼の顔にも涙が流れている。しかし、その顔は前を向いている。離れて立つ神楽も同じだった。

「ああ、やってやるよ」

彼は腕で顔をぬぐう。その目は明日を早くも見ていた。

「やれやれ。完投するほどでもなかったが……、あの3人、今後が怖えな」

宿舎への帰路、誰にも知られぬように宮沢は呟いた。9回12奪三振、被安打3ながら、その内の1本を勝田に許し、久坂にはあわやホームランの大飛球を打たれ、点を取ったとはいえ、神楽のコントロールには驚かされた。

「まあ俺は今年で卒業だ。優勝するだけよ。ここからは全力だ」

彼の目には一点の曇りもなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3942e/>

B・B・B——ベース・ボール・ブレイブス——第一部・熱き夏のブレイブス

2010年12月30日18時04分発行